

# 隠喩としての社会学理論

——「社会」はいかにして可視化されてきたか——

慶應義塾大学／日本学術振興会 澤田唯人

## 1 背景と目的

社会学は、微視的な相互行為場面から、巨視的な社会変動、さらにはその双方の繋がりに至るまで、常に人々や組織のあいだに成立している「関係性」の在り方へと関心を寄せてきた。というのも、こうした「関係性」の成立にこそ、社会学は自らの学的対象たる「社会」の存在を見出してきたからである。しかし、この「関係性」ないし「関係」という事象は、それ自体では（物理現象のように）知覚にもたらされるわけではない。したがって、理論家や学説家たちの仕事とは、通常そのままでは見えてこない「関係性」の在り方を〈見えるもの〉へ、そしてこれを明確に〈記述できるもの〉へと表現していく実践であったと捉え直すこともできるだろう。本報告の目的は、こうした「関係性」をめぐる可視化実践が、「隠喩 Metaphor」によって成立していると主張した J. アーリの議論を敷衍し、「理論」と「現実」との新たな関連づけを試みることにある。

## 2 課題と方法

アーリによれば、社会学理論とは、あるメタファーに別のメタファーを対置するかたちで生まれている。例えば、「有機体」のメタファーを用いた機能主義に対し、方法論的個人主義は「交換」のメタファーを、実証主義は「視覚」のメタファーを、闘争理論は「建物」のメタファーを対置してきた。ほかにも「(言語)ゲーム」や「システム」、「演劇」、「監獄」、「液状化」といった隠喩が社会学で用いられてきたことは言うまでもないだろう。つまり、理論家や学説家は、社会を構成する見えざる「関係性」を、ほかの何かに〈なぞらえる〉ことではじめて、「社会」を記述可能な存在として措定してきたのである。だが、以上のアーリによる示唆は、「理論」と「現実」との関連において、「特定の〈理論としてのメタファー〉が、絶え間なく移ろいゆく社会生活のなかで、何を基準に受容あるいは拒絶されてきたのか」という彼自身の問いに十分応えられていない。そこで本報告は、アーリの分析視角に内在し、これをさらに深化させる方向をとる。

## 3 結果と結論

アーリの議論は、理論的隠喩に先立って、すでに日常生活者も隠喩を用いて自らの社会生活を組織化しているにもかかわらず、両者の関連を明確にしていない不十分さがあった。しかし、同時に彼は「さまざまな形の思考がもつメタファーの基盤を『明らかにする／覆いを取り外すこと』が、社会学の主要な課題と目標の一つである」とも述べている。この点を、P. リクルの「死んだ隠喩」と「生きた隠喩」の区別と重ねれば、人々が関係性を表象する「慣用句的隠喩」ではなく、むしろ彼らが種々の「隠喩を生きざるを得ないこと」、それ自体の〈由来／条件〉を掘り出した「隠喩的レリーフ」こそが、時代を受容される理論となる。日常生活者の〈なぞらえ〉を上塗りするのでも、そこから遊離するのでもなく、むしろ〈なぞらえ〉を遡及し、〈生きられた隠喩〉の世界へと根を下ろしていく必要性が、アーリの議論からは導かれうるのである。この示唆は、「理論」と「現実」の適合性をめぐる中傷効果の問題に新たな視座を提供することとなる。

## 文献

- Ricoeur, P. 1989, *La métaphore vive*, Paris: Seuil (=2006 久米博訳『生きた隠喩』岩波書店.)  
Urry, J., 2000, *Sociology beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first Century*, London: Routledge. (=2006, 吉原直樹訳『社会を越える社会学——移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.)